

ソニーや松下と並ぶ日本の代表的な家電メーカーである。しかし、今は懐かしの音響機器やオーディオ製品など光る製品もある。ソニー
今や日常生活にすっかり溶け込んでいる製品も数多い。それらはパイオニアが先陣を切って世に送り出してきたもの

パイオニア (6773 東証1部)

だ。その表れが、DVD、CD、LD、MD、その他のすべての光ディスク、及びこれらの関連機器に関する特許をすべて保有していることからわかる。ソニーや日本ビクターと並ぶ技術のパイオニアの伝統は今も脈々と流れている。

2006年3月期の売上構成は、ホームエレクトロニクス部門(PDP、DVDレコーダー、オーディオ)が47.0%、カーエレクトロニクス部門(カーナビ、カーオーディオ)が43.8%、特許関係(光ディスク)が1.1%、その他(有機EL、電子部品など)が8.1%。2006年3月期の業績は、売上高が7549億円(+6.2%)、営業損益が164億円、経常損益が711億円、最終損益が849億円となった。ホームエレクトロニクス、カーエレクトロニクスはいずれも+10%近い売上増加を記録し、中でも薄型テレビ市場の好調によりPDPは+30%の増収となった。しかし製品の単価下落がはなはだしく、原価率が悪化して営業利益段階で赤字転落となった。次に述べる事業構造改革を断行したために特別損失が膨らんだため、最終損益では2期連続での赤字に終わった。

ポイント3 企業存亡を賭けた再建策に着手

昨年12月8日に発表された抜本的な事業構造改革の内容は次の通りである。まず組織面では、それまでの社内カンパニー制を廃止し、「ホームエンタテインメント・ビジネスグループ」と「モバイルエンタテインメント・ビジネスグループ」の2事業部制に再編。中核となる「ホームエンタテインメント」に主力のPDP、DVD、オーディオ事業をすべて集約し、現在3カ所に分散している企画・開発・設計人員を、2007年春をメドに国内1カ所に集結させて意思決定スピードを上げる。これに伴って全世界の生産拠点を40カ所から30カ所に統廃合。海外拠点で2000名の人員削減を行う。国内でも600名の希望退職を募る(最終的な応募は777名になった)。

将来の事業展開の中核と長年にわたって位置づけてきたPDP部門は、価格競争に巻き込まれて収益悪化の元凶でもあったが今後も事業展開を継続すると表明。ただし今期からは「パイオニア」ブランドでの完成品の販売だけを行い、今回の業績不振の主因となったOEM販売の依存度を引き下げる方向を決定。これに伴ってパネルの生産能力を見直し、一部の生産ラインの休止継続、新たな生産ラインの休止検討を視野に入れている。さらに有機ELディスプレイは、断腸の思いでアクティブマトリクス型の量産化中止を決定した。

その上で今後の事業展開として、当面は収益源のモバイルエンタテインメントに注力し、ここで時間を稼いでいる間にホームエンタテインメントを立て直すという方向性を打ち出した。モバイルエンタテインメントの中核はカーナビ。同社のカーナビゲーションシステム、「カロツェリア」シリーズは、国内カーナビ市場では圧倒的なシェアと支持を得ている。当面は同社の収益の下支え要因として最も期待できる分野であり、今後はカーナビシステムの普及が進んでいない海外市場の開拓を積極的に行っていく。海外のカーナビ市場は新興工業国家を中心にようやく本格的な立ち上がりの兆しを見せている。今後は中国やインドを中心に数年以内にモータリゼーションが爆発的に進む見通し。パイオニアは日本市場向けに開発したプラットフォームをベースに、海外各地で効率的な商品開発を進めていくとしている。

そしてその間にホームエンタテインメントの拡充を図る。PDPはOEMを縮小し全世界的に販売台数を伸ばしているパイオニアブランドでの販売に注力。DVDレコーダーは、欧米市場での普及価格帯商品は自社開発を中止。開発リソースを最先端の高付加価値商品に絞る。その上で、近年売上を落としているホームオーディオにグループ全体で立て直しに取り組む。リビングで音と映像を心地よく楽しむ「プレミアムホームシアター」や、携帯オーディオと接続性を高めた製品の開発などが主眼。ここでホームオーディオに強みを持つパイオニアらしい新しい展開を計画している。全社的な危機を経験して「世界のパイオニア」がようやく自らのコアコンピタンスに目覚めたようだ。この改革が成功しなければ、いずれは企業買収の目にあいかねない。存亡を賭けた再建策が始まろうとしている。

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。

パイオニア (6773 東証 1 部)

ポイント4 テクニカル:逆三尊の底入れパターン

2004 年の高値:3390 円から昨年秋には 1410 円まで 6 割近くも下落。ここで解散価値を割り込んでひとまず底入れしたが、本格反騰には今年 1 月まで待たなければならなかった。1 月末に 1530 円の二番底を入れてようやく底入れ。逆三尊的な底入れパターンを描いており、2000 円乗せでひとまずはネックラインまで到達。中期上昇トレンドを描きつつある。次なる節目は 2004 年保ち合い時の 2400 円。それを超えれば 2800 円が視野に入ってくる。

業績(連結・億円・前期比%)

| | 売上高 | | 経常利益 | | 純利益 | | EPS |
|----------|------|-----|--------|---|--------|---|------|
| 2005/3 | 7336 | 4.0 | -1.8 | - | -87.8 | - | - |
| 2006/3 | 7549 | 2.0 | -711.6 | - | -849.8 | - | - |
| 2007/3 予 | 8300 | 9.0 | 135.0 | - | 30.0 | - | 16.6 |

(四季報より)

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。